

『新宿御苑 庭園・樹林管理計画 第1期計画』の解説

(ピスタラインとサクラの景観・品種の保全管理)

1 なぜ今、計画が必要なのでしょう？

新宿御苑は、新宿駅の近くという都市の中の広大な緑の空間であり、年間約250万人の来園者を迎えている国民公園です。

では、新宿御苑の風景の魅力とは何でしょうか？ 広々とした奥行きのある芝生、春を彩るサクラ、ユリノキ等の大木、様々な様式の庭園などが思い浮かぶかもしれません。これらは皆、新宿御苑の歴史的遺産を受け継いできたものなのです。(次頁参照)

ところが新宿御苑は現在、樹木の生長や老木化に加え、利用の形態や周辺環境の変化などによって、魅力的な景観が大きく変質してきており、このままでは、受け継いできた魅力ある景観が失われてしまうおそれがあります。

新宿御苑では、これまでも「歴史・文化遺産、植物遺産の評価及び継承」を管理の方針の一つとしてきましたが、この方針を現在の状況にあった形で実現していくためには、具体的な管理の指針となるものがが必要です。この指針の一つとして、「新宿御苑 庭園・樹林管理計画」を作成しました。



国民公園・新宿御苑



新宿御苑の魅力 広々とした芝生



新宿御苑の魅力 サクラの景観

計画の作成にあたっては、庭園や植物の専門家、関係者の意見を聴くため「新宿御苑庭園・樹林管理方針等検討会」を設置し(座長：鈴木誠東京農業大学教授)、昨年からは3回の検討会を実施し、計画を作成しました。(委員名簿、別添1参照)

【新宿御苑の歴史的遺産】

新宿御苑の敷地は、江戸時代は信州高遠藩内藤家の江戸屋敷の一部でした。この時代、玉川園と呼ばれる庭園があり、その一部は大木戸門に近い玉藻池を中心とする日本庭園として残っています。

その後、明治政府は、我が国の近代農業振興を目的とする「内藤新宿試験場」を明治5年に設置し、欧米の技術や品種を含めた果樹・野菜の栽培、養蚕、牧畜などの研究が幅広く行われました。さらに、明治12年、宮内省所管の「植物御苑」となり、皇室の御料地・農園としての性格が強まりました。

現在の温室は現代的な建築ですが、もともとは明治8年に建築された無加温式の温室が始まりであり、イチゴ、メロンなど西洋の野菜、果物、洋ラン等の花の栽培、改良が行われました。今も温室には新宿御苑で作出された「フクバイチゴ」や「シンジユク」の名を冠した洋ランが引き継がれています。また、この時代、ヒマラヤシダー、ユリノキ、プラタナスなど海外の樹木が導入されましたが、現在、苑内には、それらの一部やその子孫が巨木となって新宿御苑の魅力の一つとなっています。



新宿御苑で作出され
新宿の名を冠した洋ラン
Paphiopedilim Shinjuku#144



フクバイチゴ
新宿御苑で作出され、
日本のイチゴ園芸品種の祖となった

その後、植物御苑を庭園に改修することになり、植物御苑の責任者であった福羽逸人が、フランス人技師のアンリー・マルチネに設計を依頼し、4年の工期を経て明治39年（1906）に完成し、名称を「新宿御苑」と改めました。

新宿御苑は、近代フランスの大規模造園に見られる様々な庭園を複合させた庭園であり、幾何学的なデザインの整形式庭園、広大な芝生や池のある風景式庭園が日本庭園とも連なって配置されています。現在の新宿御苑の庭園デザインはこの時のものが基本となっています。今回の計画の対象であるピスタラインは、この庭園デザインの中でも特に重要なものの一つであり、広大で奥行きのある芝生の景観は、今もなお新宿御苑の最大の魅力となっています。



アンリー・マルチネが作成した庭園改修案の図

皇室の庭園となった新宿御苑では、大正6年から観桜会(戦後は「桜を見る会」)の会場になりました。サクラは、明治39年の庭園改修当初から新宿御苑を特徴付けるものとして植栽されており、その景観は100年以上経過した今も引き継がれています。

また、新宿御苑は昭和4年から観菊会の会場ともなりました。現在も毎年開催される菊花壇展は、皇室庭園時代の菊栽培技術を継承する貴重な場であり、また、新宿御苑の秋を象徴するものとなっています。

新宿御苑は、大正年間に風景式庭園が9ホールのゴルフコースとしても利用され、植物御苑時代の休憩所(旧洋館御休所)が模様替えされてクラブハウスもかねるようになりました。新宿御苑には、旧洋館御休所の他にも御涼亭など、皇室庭園時代を伝える建築物が今も保存されています。



菊花壇展(大作り花壇)



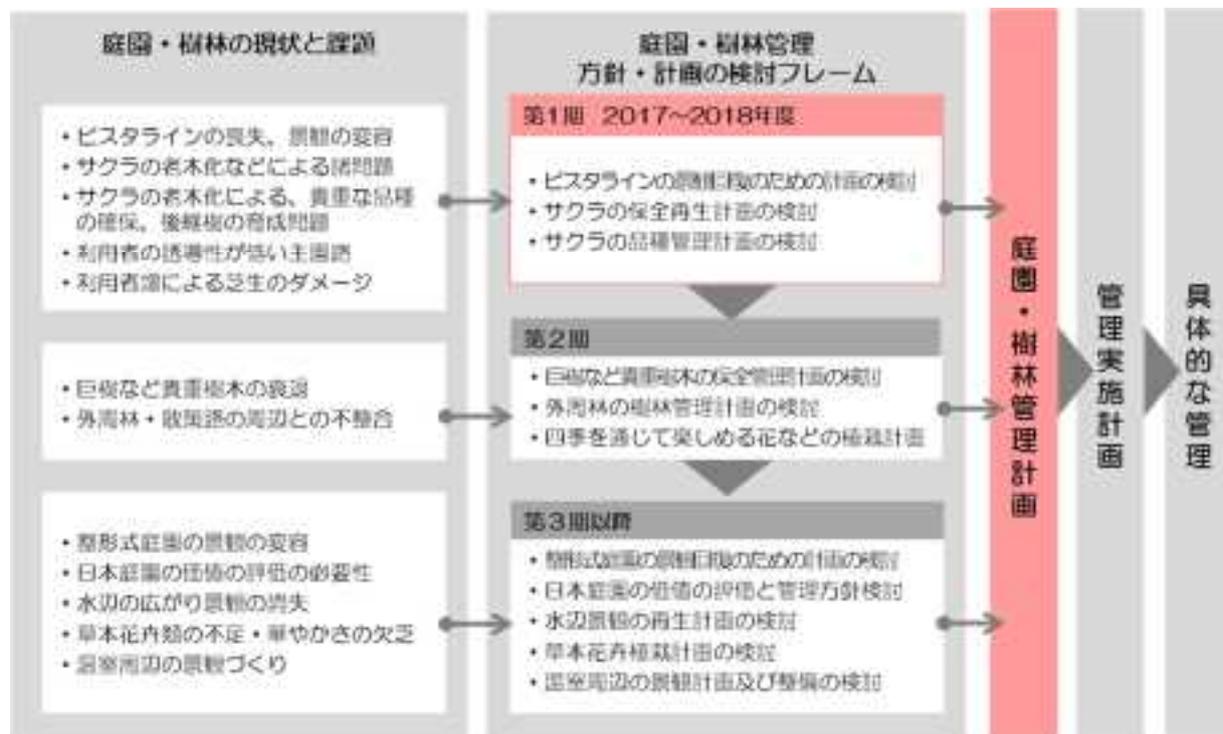
旧洋館御休所(重要文化財)

本計画は、新宿御苑が継承してきた以上のような歴史的遺産を、庭園・樹林管理の視点から新宿御苑の魅力として引き継いでいくため、テーマ毎に分けた現状の課題をふまえた具体的な方針を示すものです。

2 計画の特徴と第1期のテーマ

この計画は、庭園・樹林の管理に関する課題をいくつかのテーマに分け、そのテーマ毎に計画を作成していくこととなります。今回作成した計画は、計画の第1期にあたるものです。

この計画のフレーム(枠組み)は次の通りです。



計画のフレーム

【この計画の特徴】

この計画は、庭園樹林を管理する上で、魅力ある景観を継承していくための技術的な方針を示すものです。

実際に、現場で維持管理や庭園整備を行うにあたっては、計画で示された方針を現場レベルで具体化する実施のための計画を作成することが必要です。

また、計画の内容には当面実施する内容も含まれますが、計画全体としては長期的視点で段階的に達成していくものです。

今回の計画は第1期のものですが、今後、第2期、第3期と計画が作成される中で、これらと整合のとれた管理を実施していく必要があります。計画の実施に当たっては今後も学識者の意見を聴き、質の高い管理に生かしていく方針です。

3 計画のポイント

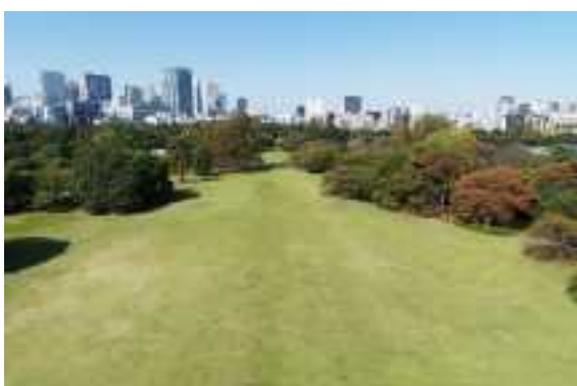
(1) 広々とした奥行きのある景観を守る(ビスタラインの景観管理計画)

新宿御苑が多くの人たちを引き寄せる最大の魅力は、「広々とした奥行きのある芝生、その両側を彩る桜」の景観とすることができます。

この庭園景観を創り出しているのは、ビスタライン(見通し線)という近代フランス式庭園のデザイン手法であり、これが現在も継承されています。

しかし、この貴重なビスタラインの風景は、樹木の生長と老木化等によって変質しつつあり、このままだと来園者を魅了する景観が失われるおそれがあります。

このため、このビスタラインの景観を保全するための計画を作成しました。



利用者を魅了する広がりとお行きのある
ビスタラインの景観



樹木の生長、高密度化などにより
狭隘化が進み、ビスタラインのお行きや
広がりが失われつつある

【計画の概要】

- ・ ビスタラインの設計当時に意図された「広がりを持った見通しの良い眺望景観」と「多様な視点場からの額縁効果を持った眺望景観」を回復します。回復に当たっては、利用等の観点から新宿門方向からの見通しも意識します。
- ・ 景観の回復のために、ビスタラインを遮る樹木について樹勢の状況もみながら、段階的に除間伐、剪定をおこなっていきます。この実施に際しては、景観や利用に関する他の観点も含め対応を決めていきます。
- ・ ビスタライン中間付近の三角花壇周辺は、特に見通しが遮られており景観保全や利用上の支障が生じているため、当面重点的な対応を図ります。(別添2 参照)
- ・ 新宿門からビスタライン側への入り込みの集中を緩和するため、新宿門から東側に延びる北側園路への入り込みを誘導するため植栽等の改善を図ります。(別添2 参照)



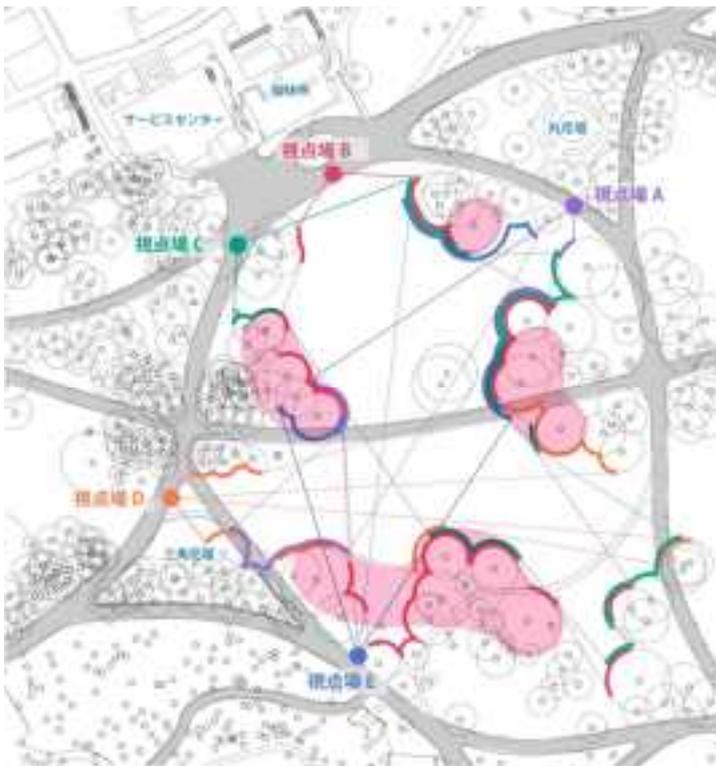
三角花壇付近のビスタライン

(2) サクラの彩る景観を守る(サクラの保全再生管理計画)

新宿御苑のサクラは、観桜会の会場など御苑の歴史との関わりが大きく、また今も総理大臣主催の「桜を見る会」が開催され、ソメイヨシノの開花時期には多くの方が花見に訪れるなど庭園景観を魅力的にしている重要な樹木です。

しかし、サクラの老木化による樹勢の衰退や樹形悪化が進み、新宿御苑の魅力であるサクラの景観を損なう問題が生じています。

第1期では、新宿御苑の景観を象徴するピスタライン周辺のサクラを対象とし、管理計画を作成することとしました。



周囲からの見え方についての分析
(旧洋館御休所前芝生広場)



樹形の悪いサクラ



樹形の良いサクラ

【計画の概要】

- ・計画は、ピスタラインの確保という視点、サクラの歴史文化的価値、庭園景観上の価値について評価をしつつ、現代の利用者ニーズへの対応という視点も加え、サクラの価値の最大化を実現すること基本とします。
- ・サクラの更新にあたっては、観桜期における利用日の平準化や長期間サクラを楽しむことができるように配慮して、早咲きと遅咲きのサクラの植栽場所の再編などにより、ピスタライン各所で楽しめるよう植栽を行います。
- ・ピスタラインの前面を彩るサクラは、ピスタラインの景観を決定づける重要な樹木として評価し、樹形、樹勢の状況に応じ周辺樹木からの被圧等の関係にも配慮した維持管理を行うこととします。
- ・特に重点的に取り組む場所として旧洋館御休所前芝生広場付近について衰退木の更新、樹勢改善のための管理等を行います。

(3) 歴史あるサクラの品種等を継承する(サクラ品種管理計画)

新宿御苑のサクラは、明治39年の庭園改修以降、全国から多くの品種が集められ、その後も多種多様なサクラが植栽され、100年を超える歴史の中で、様々な品種といわれのあるサクラの木々が受け継がれてきています。

しかし、多くの品種で老木化が進み、御苑における貴重な品種の継承、後継樹の育成が必要となっており、現存するサクラについて、導入の経緯やいわれ、品種としての希少性などについて整理し、後継樹の育成と植栽計画などの品種の保存・継承のための管理計画の作成が必要となっています。



大正時代に作成された桜調書
(新宿御苑桜調査事業功程附図)



希少性の高い品種
ヒマラヤヒザクラ

【計画の概要】

- ・「新宿御苑にとっての価値」を評価する項目を、歴史性、由来・いわれ、希少性、人気などの観点から設定し、現存するサクラを対象として、各項目に該当する品種・個体を分類しました。
- ・この評価にもとづき、ヒマラヤヒザクラなどの特に貴重な品種は、新宿御苑に現存する樹木から接木苗(つぎきなえ)を育成し受け継いでいくこととし、ソメイヨシノなどのそれ以外の品種は、外部からの導入も含めて後継樹を確保していくこととしました。
- ・個体については、「苑内に現存する樹木から接木苗を育成し、受け継いでいく個体」と「苑内に現存する個体そのものを可能な限り保存していく個体」の2区分としました。
- ・品種の保存にあたっては、日常的な管理、情報収集や苗木・幼木の育成等の各段階に分け、管理者(国、委託事業者)、ボランティア、専門家が連携して取り組んでいく体制を構築することにしました。

新宿御苑庭園・樹林管理方針等検討会(第1期)委員名簿

氏 名	所 属
鈴木 誠	東京農業大学地域環境科学部造園科学科 教授
小野 良平	立教大学観光学部観光学科 教授
高橋 康夫	一般社団法人 日本庭園協会 会長
和田 博幸	公益財団法人 日本花の会 主幹研究員
宍戸 博	一般財団法人 国民公園協会 新宿御苑支部長

オブザーバーとして、委託管理事業者及びボランティア団体(グリーンアカデミークラブ)が参画

模式・地名図

